

## ＜書 評＞

三好 春樹（生活とリハビリ研究所 理学療法士）

## 老人の生活ケア

## ＜生活障害＞への新しい看護の視点

竹内 孝仁（東京医科歯科大学医学部・リハビリテーション部医師）

●生活の場からとらえ直した  
老人ケア

本書は、＜生活ケア＞という新しい視点から、老人の医療・看護・リハビリテーションのありかたをとらえ直した本で、老人を、どのような身体障害をもっているか、という視点からだけでなく、その身体障害によってどのような＜生活障害＞を来しているかという視点から、生活再建をめざすケアの理論と実践をまとめたものである。

「飢え」と「病い」は生活上の大敵である。だから医学は本来もっと生活に密着していたはずであった。しかしこの「生活」が、私たち自身のものでもあるのに、玉ねぎの本態を知ろうと皮をむいていったら何もなかったというのに似て、きわめ難解な代物である。この得体の知れなさが「人間学」の遅れとなっているのだが、ミシェル・フーコーによれば、医学はとうの昔に生活から訣別しているという。生活への奉仕者がそれに無頓着となったら、病人はどんな扱いを受けることになるのか。

「点滴」をしない病院はないものか、という老人たちの叫びはその端的な現れである。ことは老人病院の経営体質の問題ではなく、医学の根幹にまでさかのぼるものだから根は深い。

在宅や施設の老人たちに既存の医

学、看護学といったものが何の役にも立たないことが多い。かえって「素人」の家族や職員たちの中に、驚くほど有能な人たちがいる。ごく少数だが、良心的な専門家がこのような現状と自らの無力を嘆く。しかしこれは対岸の火事を恨むに似ている。どだい立っている場が違うのである。

三好氏は対岸から届かぬ水をかける無駄をやめ、こちら側（生活の場）から相手を引き寄せようと開き直る。さて、ここでまた「生活」という難問に突き当たる。生活は生身の現実だけに、普遍性のほかに個別性を、歴史（時間）と空間を、1人ではすまないから他人が、あるいは社会が、近代が……と無数のものがイモづる式にからみあう。このイモづるを整理するために、三好氏は「まえがき」にあるように、吉本隆明や増田みづ子や、そのほか名前を出さないまでもイリイチや、誰かの現象学や身体論を引っ張り出している。つまりこれは三好氏の「生活論」といいいい。

こうして土台をはっきりさせた上で、老いを、医療を、専門性を引き寄せにかかる。つまりはもう一度生活への奉仕者にこれらを仕立てあげようと試みるのである。

いったん生活の奥行きと広がりの中で問題をとらえようとすれば、老いも、障害も、寝たきりも、痴呆も、

まったく新しい様相を帯びてくる。

第4章「Nさんにとっての＜ロシア＞・痴呆老人考」がその典型だ。痴呆は脳の器質的障害……といった切り棄てる理論には期待すべくもない人間への深い洞察と、なによりもそこから「治って」いくたしかな現実がある。

この書物は、なにかの知識を得ようとして読むようなものではない。また、強固な専門学意識をもって臨むと、まずアレルギーを起こすこと請けあいである。しかし、人びとの生活と医療、医学や看護学といったもののギャップをうすうす感じ取っている人にとっては、その関係を知る手がかりとなるにちがいない。

また本書には、病院・老人ホームなどの施設における老人の生活実態、「老い」の理解と接しかた、看護や介護の実際、生活障害のレベルにあわせた機能訓練やADL改善、地域の通所訓練センターにおけるリハビリテーション活動など、老人ケアの実践的理論と方法が述べられているが、そのほかにも「おもらしするほど長生きしよう」をスローガンにして、「おむつの意識革命」として新聞・雑誌等で話題になった『オムツのファッションショー』の台本や、未来社会における老人ケアの虚像と実像を描いた寸劇『SF・地域リハ』の脚本も収録されており、この種の本としてはきわめてユニークな本となっている。

最後に、このような書物が伝統ある医書出版社から刊行されたことに注目したい。19世紀的な医学・医療が終焉を迎えつつあるのを鋭く嗅ぎとったのであろうか。時代はあらゆるものを変えていく。

（A5判、頁222、図38、写真43、¥2,300、〒300、医学書院刊）